

## 論文の概要および審査結果の要旨

氏 名（本 籍）	高屋 茂男（島根県）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	甲第106号
学位授与の日付	平成31年3月25日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第5条第1項
学 位 論 文 題 目	中近世移行期における城館遺構と地域社会に関する研究
論 文 審 査 委 員	主査 門田 誠一（佛教大学教授） 副査 渡邊 秀一（佛教大学教授） 副査 貝 英幸（佛教大学教授）

### 〔1〕論文の概要

本論文は序章、本編二部合計七章および終章からなり、本編は中世後半期から近世初頭の城郭遺構の分析と地域における城館の展開や位置づけに関する具体的な論考から構成されている。城館は山上や丘陵などに位置する城郭とその麓などに付属する館とをあわせた名称であり、これらに関しては戦後における中・近世考古学の展開のなかで、軍事的および政治的、社会的意味が検討されてきた。中世・近世の城館の研究は縄張りと呼ばれる施設や建物等の平面的配置の検討が基本となっていたが、発掘調査が行われることによって、遺構の詳細やそれらの時期ごとの変化が明らかにされてきた。城館研究はこれらの方法にとどまらず、城館や城下町などに関する史料・文献などの文献史学の方法および歴史地理学的な知見や方法を用いる多元的な検討が可能であるが、本論ではこれらを用いつつ、城館の遺構の検討にとどまらず、城館の変容や地域における複数の城郭の相互的關係などから地域史の復原を試みた。論文の構成は以下のとおりである。

### 目次

序章 研究の目的

第1部 城館遺構の分析と大名勢力

第1章 畝状空堀群の研究史と視点

第2章 畝状空堀群の分類と構造

第3章 畝状空堀群の地域的特質に関する検討

第2部 中近世移行期における城館構成の変容と地域社会

第1章 丹波国何鹿郡上林谷における事例検討

第2章 丹波国船井郡園部における事例検討

### 第3章 山陰における織豊期城館の展開

### 第4章 出雲月山富田城の構造と位置付け

### 終章

以上のような多様な内容から中世後半期から近世初頭にかけての城館を地域単位で検討した点に本論文の特色がある。以下に内容を目次に従って摘要する。

序章では、本論文の目的と研究方法を本書の内容ごとに述べている。まず、遺構の分析による戦国期城館の軍政的な検討の意味を説く。また、城館の構成を示す縄張り図をもとにした地域社会における城館の位置づけを基本としつつ、城館単体での解釈ではなく、地域における包括的な検討が地域史研究に重要であることを示す。すなわち、縄張り図や城館遺構の基本的な検討だけでなく、史料・文献との対照や歴史地理学的方法も用いながら、第一部では、戦国期城館の特色を戦国大名の勢力との関係から論じ、第二部では、戦国時代後半から江戸時代初めころの城館の建物や施設の構成とその変遷や地域における城館の分布やその変化から、城館を媒介とした地域史の変容を論じるという目的を示した。このような方法と目的に基づき、以下のような個別具体的な各論として論述している。

第1部では、戦国期城館の特色として「畝状空堀群」を取り上げ検討し、第1章では、研究史することによって、盛行する時期の違いや横堀との組み合わせによる新旧の判断などを行う手法や各地域における分布の検討、遺構分類などの研究を丹念に整理し、現状と課題を示した。

第2章では、主に西日本で発掘調査事例に検討し、基本的な分類と時期ごとの変遷を示した。畝状空堀群は城館の防御施設の中でも、堀切、堅堀から発展した施設であり、本来は基本的な技術で構築されており、広く導入が可能であったが、とくに極度の軍事的緊張の高まりの中で、勢力の境界である領域抗争圏に多くみられるとし論じている。

第3章では、具体的な事例を検討して、畝状空堀群は一時的な軍事的緊張下では、陣城などで限定的な仕様がなされ、ある一定の期間、軍事的緊張が続き、なおかつ中小規模の国人が並列的な勢力を維持している地域で導入が目立つ傾向があることを指摘した。

第2部第1章では、丹波国何鹿郡上林谷を取り上げて検討を行った。日置谷城や上林城には役割分担があったとした。

第2章では、船井郡園部を事例として検討し、近世初頭に園部陣屋が構築される前提として、周辺の町場、門前町などの検討を行い、生身天満宮の所蔵の禁制や普濟寺鰐口銘などから天満宮の門前町の優位性を明らかにし、園部陣屋・陣屋町構築の過程を明らかにした。そして陣屋町は寺社の創建年代や位置から発展過程をとらえ、概ね小出吉親存命時期に町場の拡大が見られ、初期の段階で新町が成立していることを明らかにした。

第3章では、山陰における織豊期城館の展開を検討した。第1節では、因幡、伯耆、出雲、石見の領主変遷について検討し、第2節では、出雲・真山城を取り上げ、尼子段階から毛利、吉川期における城館の改修・維持について検討した。それにより毛利氏は尼子方の城を奪った後、出雲において拠点城郭である富田城以外にも山城をどのように維持管理しているかを明らかにした。第3節では、従来研究史上では等閑視されてきた伯耆・亀井山城について検討した。伯耆における石垣を持つ城館としては米子城があり、これについては研究が進みつつあるが、亀井山城については縄張り研究での先行研究はあるが、石垣

について詳細に検討したものはなく、改めて縄張り調査を行い、石垣については復元案を示した。そして、同様の構築方法は米子城の吉川段階と言われる石垣や、富田城山上部などでも確認できるため、吉川期に亀井山城付近で発見された日野銀山との関りで構築されたものと推定した。

終章では各章ごとに論点を整理し、課題および展望を示した。

## 〔2〕 審査結果の要旨

本論の研究は大きく以下の二つに大別される。第1部では、戦国期城館を畝状空堀群という外部施設の構造やその変遷から、地域勢力間の軍事的緊張による境界領域に特徴的にみられることを示し、中小規模の国人が並列的な勢力を維持した地域で導入される傾向を指摘した。第2部では、城館遺構の検討も含めて、丹波・丹後・出雲・石見を取り上げ、地域における城館の分布に着目して、城館相互の関係性や陣屋町の形成およびそれらの変容について検討し、その結果、地域における城館の機能の差異と役割の相違、陣屋町形成の選定としての築城、銀山などの生産遺跡の展開を契機とした城館の構築などを個別具体的に例示した。あわせて、建物と施設物の構成の変遷をあとづけることにより、地域における拠点的城館の機能の変容を具体的に示した。

以上のような考察による本論文の特色および特筆すべき点は、以下の七つにまとめられる。

第一には、畝状空堀群に代表される実際の城館の機能面から、城館の属性の変化やその意味を戦国期の地域社会における社会状況の変容の端緒として分析した点である。

第二には、城館を単体でとりあげるのではなく、とくに城館の機能的差異に着目して、周辺の城郭とあわせて地域における体系的な検討を行った点である。

第三には、山頂部などに築かれる城郭と山麓などに位置する館・陣屋などを統合的に検討し、それらの所在する地域の形成過程を復原する試みを示した点である。

第四には、地域における城館を単体で捉えるのではなく、相互の関係性を重視し、城館の構成から地域史を構築しようとした点である。

第五には、陣屋および陣屋町の形成に関して、城館と陣屋を有機的にとらえて、相互の関係から陣屋町の形成と展開を論じた点である。

第六には、城館を用いた地域史の構成に用いた重要な資料である縄張り図などのうち、重要な根拠となる対象について、著者自身の調査によって作成し、それらを有効に用いている点である。

第七には城館の構造や平面的建物配置、立地環境などを考察する際に縄張りや考古資料のみならず、地域に遺存する文献・史料に目を配り、それらを総合的に判断した点である。

以上のように本論文では戦国期から近世初頭の城館に関して、遺構・遺物などの考古資料のみならず、文献・史料や歴史地理的知見を用いて、地域における体系的な城館の把握を行っている。ただし、その前提として、本論文の第一部で取り上げた畝状空堀群の考察に端的に現れているように学史・研究史を丹念に整理したうえで、詳細な遺構の観察によって立論するという物質資料を研究するうえでの基本を踏まえた堅実な方法に立脚する研究である。

序章でもふれられているように、これまでの城館研究史ともすれば城館ごとの事実報告や城館単体での評価などが主流であったのに対し、このような方法と視点を発展させることを目的として、城館の研究において、これまで重視されてきた城館の設計と平面的構成を示す縄張り図だけでなく、発掘調査された遺跡としての城館の遺構や遺物などの考古学的知見や地名・地形および絵図などの歴史地理学的要素、地域に残る史書・文献・絵図などの史料を用いて多角的かつ複眼的な検証を行ったことが本論の特筆される点である。とくに城館の分布や考古学的知見をもとに、地域における城館相互の機能や関係性、また、陣屋の構築や陣屋町の形成、拠点としての城館の変遷などによって、地域史研究の方法と視座を提示したことは重要である。また、既述のように、これらの考察に用いた考古学および歴史地理学的な資料には、著者が地域の文化財担当者として継続してきた長期にわたる堅実な実地調査によるものが多く、一次資料の発信という意味でも資するところが大きい。

なお、今後の公刊等に際しては、個別具体的遺構の研究史の分析と本論の目的との関係性を示し、地域に遺存する文献・史料・絵図などの取り扱いでは引用・参考文献の書誌や属性、語句の説明および引用の意図などをより明確にし、詳細な地域の政治・社会史的研究の動向を参照したうえで、城館の地域比較とともに地域社会内部での位置づけをより緻密に把握するなどの展開が期待される。これらはもとより論旨に包摂されている内容ではあるが、記述の手順や方法・体裁その他を見直すことによって立論や考察の背景がよりいっそう明らかになり、当該地域・分野の研究者以外への理解を促すことができよう。むしろ、このような一定の課題の存在は本論が城郭研究のみならず、多様な分野に影響を及ぼすことを裏づけている。

本論の内容は、中世後半から近世前半にかけての城館に関して、縄張り図の解釈にとどまらず、城館を遺跡としてとらえ、発掘調査の知見や史料・文献・絵図などに記された関連する内容を包摂し、すなわち考古学・文献史料・歴史地理の知見などの多様な証左を用い、多角的かつ複眼的な視点から検討を行っており、これまでの城館そのものに対する研究にとどまらず、城館を媒介とした地域史研究として実証的かつ堅実な内容である。

よって、本論文は博士（文学）の学位を授与するに相応しいと判断する。